2026 年度 東京福祉大学 学校推薦型選抜 [公募型]
特別選抜・編入学

小論文課題 課題文 I (テーマ:福祉)

※無断転載・複製を禁ず

次の文章を読んで、内容を要約した上で、あなたの考えを 600 字から 800 字で述べなさい。

※作成にあたっては、本学所定の「小論文課題 解答用紙」を使用すること。

止まらぬ少子化 急がれる支え手の確保

人口が減り続ける日本の姿が、また裏付けられた。

このままなら、暮らしを支えるモノの作り手やサービスの担い手の数は確実に先細りし、社会が立ちゆかなくなる未来が現実味を帯びる。高齢化で介護ニーズはこれからいっそう高まる。お金だけでは解決できない人材確保の具体化と前進が、急務だ。

2024年に生まれた日本人の子どもの数は70万人を割り込み、過去最少となった。1人の女性が生涯に産む見込みの子どもの数を示す「合計特殊出生率」は1.15で、過去最低を更新した。

少子化が長く続き、親となって子どもを産む年齢層はかつてより少ない。国は「異次元の少子化対策」を掲げて児童手当の拡充など対策を打ってきた。しかし効果が表れるのには時間がかかり、出生率の減少傾向にも歯止めはかかっていない。

私たちの不安の正体はお金の不足ではなく、「働くヒト」の不足にある——。外資系証券トレーダーの経験を生かし、現在は中高生らへの金融教育に携わる田内学さん（46）の言葉が、少子化問題の本質を突いている。

教育や医療、住宅の提供も含め、社会に必要なモノやサービスを支えるのは人だ。国や自治体が予算を投じ、平等に届くよう再分配しても、人が足りなければ供給そのものができなくなる。

懸念が強いのは、介護や福祉などケアを提供する分野だ。24年に亡くなった人は160万人を超え、過去最も多かった。人生の最終盤に介護を必要とする人は多いが、担う職員の数は23年度に初めて減少に転じた。訪問介護など、絶対量の不足が顕在化しているサービスは数多い。

各分野で支え手を確保できなければ、持続可能な社会は築けない。国をあげて全力で取り組む必要がある。

65歳以上で働く人はこの20年で増え続け、医療・福祉分野での伸びが目立つ。人口の3割を占める高齢者は人生経験も豊富で、期待される分野は幅広くあるだろう。

賃上げなど処遇改善だけでなく、働き方の変革も推し進めたい。男性の正社員が長時間働く「分業型」から、高齢者や女性を含め多くの人が短時間でも働く「参加型」を定着させるのに、これまでの慣習や常識の打破に躊躇^{ちゅうちょ}してはならない。働く外国人のための環境整備、人工知能（AI）などデジタル技術による効率化の戦略もいる。

不安から脱却し、安心できる社会をつくるために、一人ひとりに何ができるか。考える機会としたい。

出典：朝日新聞 2025年6月6日「社説」